

夕ゆうべは少すこし飲のみ過すぎちやつたみたいだなあ、と思おもいながら、青せい年ねんロンシルは砂すな浜はまを散さ歩んぼしてました。夕ゆうべは何なにを飲のみ過すぎたかつて？ お酒さけですよ、もちろん！

さて、それはある爽さわやかな朝あさのことでした。ここは、海うみ沿ぞいにあるプーレプーレの小ちいさな村むらです。ロンシルは、柔やわらかい砂すなに時ときおり足あしを取とられながら、寄よせては返かえす波なみをぼんやりと眺ながめていたのです。

「ふわああ」

周まわりに誰だれもいないからって、こんな大おおあくびして。

「あれ、あんなところに小ちいさな舟ふねが——」

ロンシルは、見み慣なれない舟ふねが砂すな浜はまにあることに気き付づいたのでした。そして、あつ、と

驚きの声をあげました。その舟は、縦真つ二つに割れているようなのです。

「何だろう、難破かな」

ロンシルは小走りで舟に近づきました。もしも難破船だったら、誰かが中にいて助けを求めているかもしれません。

でも、そこには誰もいませんでした。その代わりに、朝日を受けてキラキラと光る美しい一丁の斧が、割れた舟底に突き刺さっていました。刃は斧にしてはとても薄く、鋭利だけれど、とても木を倒せるほど頑丈な作りには見えません。でも持ち手は太くしつかりしていて、握りやすそうでした。手に取ってみると、とても軽くて、決して体格がよいとは言えないロンシルでも自由自在に振り回すことができました。

「とても美しい斧だなあ、美術品のようだ」

ロンシルは、嬉しそうにそうつぶやきながら斧を肩に乗せ、家に帰って行きました。

「ねえ、母さん、見てごらんよ、これ」

ロンシルは得意げに、母のネーメに見せました。

「ほう、立派な斧じゃないか。どれどれ、なんだかちよつと変わってるねえ。こんなもの、どうしたんだい」

「砂浜に打ち上げられてた小舟にあつたんだ」

「誰かの大事なものじゃないのかい？ 人のものを勝手に持つてきたらだめじゃないか」

「何だか小さな子供に言う言葉みたいですね、ロンシルは立派な青年なのに。」

「それがね、母さん。その舟つてのは、真ん中から真つ二つに割れてたんだ。きつと、嵐で難破したにちがいないよ。乗つてた人は海に投げ出されてしまつて、とうに亡くなつてるんじゃないかな」

「そうかい……。それなら、天からの授かりものだ。大事にするんだね」

「ああ、もちろんだよ」

朝ごはんを終えると、ネーメが言いました。

「なあロンシルよ、その斧で、木を切ってきておくれよ。夕べのおかしな嵐で、屋根が少し壊れてしまったろう。お前、何とか直せないもんかね」

「ああ、そうだね、じゃあやってみるよ」

ロンシルは母親思いの良い息子でした。父親はずつと遠くに出稼ぎに行っていましたから、ロンシルは大事な男手なのです。プーレプーレの村はせっかく海沿いにあるのに、海からの恵みだけでは食べてゆくことすらも難しいのです。潮の流れが急なせいで、どんなに頑張つて船をこいでもすぐに岸に戻されてしまつて、売るほどの魚が獲れることもなかったのですから。

ロンシルは、裏の小山に出かけて行きました。そこへ行けば硬くてしかもしなやかな

木がたくさん生えていることを、知っていたのです。木肌が滑らかで自分の首周りと同じくらい太い木にロンシルは目を留め、それを切ることに決めました。

「そーれっ！」

掛け声も勇ましく、ロンシルは思いつ切り斧を振り下ろします。

カーーン！

甲高く乾いた音が、青い空に響き渡りました。あまり力持ちではないロンシルですが、輝く斧は太い木の幹に深々とめり込んだのです。

「よーし、もう一回」

ロンシルは力いっぱい、斧を引き抜きます。いえ、引き抜こうとします。

ところが、幹に深々と食い込んだ斧はびくともしません。ロンシルは懸命に力を込め

て、斧おのを引き抜ひぬこうとしましたが、どんなに押おしても引ひいても、斧おのは全く動うごかないのでした。ロンシルの額ひたからは玉たまのような汗あせが滴したり落おちます。やがて、空そらの色いろが茜色あかねいろに染そまり、ロンシルは疲つかれ果はててその場ばに眠ねむり込こんでしまいました。

2

ある日ひルルルは、ユツポユツポの海岸かいがんに立たって海うみの向むこうを見みていました。昨日きのうとうとうまた、村むらの大事だいじな漁師りょうしが一人ひとり、イカの化け物ばものの犠牲ぎせいになってしまったのです。長い間あひだ、イカの化け物ばものは姿すがたを現あらわしていませんでした。もう何年なんねんもの間あひだ、漁師りょうしたちはあの危険きけん極きわまりない渦うずに近ちかづこうとはしませんでしたし、あの場所ばしょ以外いがいでイカの化け物ばものが海うみの上うえに姿すがたを現あらわすことなんてなかったのです。あの渦うずの近ちかくは素晴すばらしく豊ゆたかな漁場ぎょじょうでした

が、これまではずっと、別の場所で充分な量の魚を獲ることができたのですから。

でも、あの日を境にするように、獲れる魚の量が目に見えて減っていきました。海にはたくさんの魚がいるのです。それは、たしかなことでした。これまでと同じように、長老たちが風や気温を読み取って、魚の多そうな場所を選んで漁に出ました。漁師たちは、行く先に魚の群れがいることを海の匂いで感じ取りました。そして、いつもの歌を唄いながら、わくわくして沖へと向かいました。それなのに、真っ黒い群れが海を埋めているはずの場所に漁師たちが近づくと、海の色がさあつと変わってしまうのです。

来る日も来る日も、一番小さなたった一つの網でさえ、いつぱいになることはありませんでした。漁師たちはすっかり魚に嫌われてしまったように、とぼとぼと浜に戻ってくるしかなかったのです。

いくら村の人々が少ない食べ物で我慢をしても、エックエックの王様が許してはくれ
ません。漁師たちは愛する家族のやつれゆく顔を見ながら、もう、今のやり方を続ける
ことはできないのではないかと、思い始めていました。そうです、ユツポユツポの漁師
たちには分かっていたのです。誰も口に出しては言いませんでしたが、たった一つだ
け、魚をたつぷり獲ることのできる方法があることを。

網をいっばいにするための、たった一つの方法——。そうです、それは、あの恐ろし
い場所に行つて漁をするということなのでした。

ルルルは知りませんでした、近頃ユツポユツポの漁村には、エックエックからの使
いが度々やつて来ていました。エックエックの国じゅうに届けるために、もつと魚を獲
れ、もつともつと、どんどん漁に出て山のように魚を獲つて参れ、と、それはもう厳し
く漁師たちを責め立てるのでした。使いは、もしもエックエックに届ける魚が足りなく

なれば、兵を送つてお前たちを皆殺しにしてやるからな、と、顔を真っ赤にして叫ぶの
でした。国じゅうの民が腹を空かせてユツポユツポの魚を待っているんだ。そのことに
王様はたいへん心を痛めているのだと、泣いたり怒ったりしながら、使いの男は大げさ
な身振りで話すのです。

でも、どうしてユツポユツポの魚がそんなに必要なのでしょうか？ 他に海はないの
でしょうか？ エックエックの湖では、ぜんぜん魚が獲れないのでしょうか——？

それに、あのアレックス王は、そんなに国じゅうの人々のことを思いやることができ
る王様だったのでしょうか——？

漁師たちは相談し合いました。そして、決めたのです。イカの化け物は恐ろしいが、
王様の怒りはもつと恐ろしい。あの場所は、本来はとても良い漁場なのだから、あそこ
へ出て行くしかない。男たちは、そう結論しました。そしてとうとう、力があつて勇氣

のある者ものから順じゆんに、あの場所ばしよへ漁りまに出て行くゆことにしたのです。とても運うんのいい時ときは、イカの化け物ものは出でてきませんでした。その次つぎに運うんのいい時ときは、イカの化け物ものが出でてきても、魚さかなを船ふねに積つんだままなんで何とか逃にげおおせることができました。

いっぼう運うんの悪い時ときは、船ふねいっばいに積つんだ魚さかなを全部ぜんぶ放ほうり出だして、ほうほうの体ていで逃げ帰かえってくるしかありませんでした。でも、それだつて一番運いちばんうんの悪い時わるに比くらべればずつとまします。そういう時ときは、海うみに出でた男おとこたちは誰だれも帰かえってくることができなかつたのですから。

ルルルは十七歳じゆふなさい、もう一人前いちにんまえの立派りっぱな漁師りようしです。だからルルルがあの場所ばしよに行くゆ順番じゆんばんも、すぐそこまで迫せまっていました。本当ほんとうは、とてもとても怖こわくてしかたありません。だって、あのカニエスさんが腰こしを抜ぬかすほどの恐おそろしい化け物ものなのです。

でも、ルルルには、一つひとだけ分わかっていることがありました。そうです、あの斧おの。カ

ニエスさんがイカの化け物に挑もうとしたあの斧があれば、きつと、退治することができます。そうルルルが思ったのには、ちゃんと理由があります。

その話をするには、少し時をさかのぼらなくちゃいけません。

そう、あれは、ルルルがまだ十二歳だった頃のことです――。

3

エックエックの国から帰ってきたルルルを、村の若者たちが出迎えました。その中に、一人の若者がいました。トツカトツカのカニエスさんに、素晴らしい斧を手渡したあの若者です。名を、ミデルといいます。

若者はなぜだか、ルルルを前におどおどしていました。

「カニエスさんは？」

ミデルが聞きました。

「カニエスさんは、トツカトツカの国に帰ったよ、王様からたくさんのお土産をもらつてね」

ルルルが言うと、ミデルはホッとため息をついて、胸をなでおろしました。

「すごいや、じゃあやつぱり、カニエスさんはあの斧でイカの化け物をやっつけたんだね？」

「ううん、それは、だめだったんだ。化け物はそのままでよ」

ルルルは、明るい表情で言いました。それを聞いたミデルは、たいそう驚きました。

冒険は失敗に終わってしまったのに、どうしてカニエスさんは王様からお土産をもらうことまでできたのだろう、と思つたのです。勇気を示すことができなかつた若者は王様に首をはねられてしまうのだと、風の噂に聞いていたのですから。

「それなら、どうして？」

「カニエスさんはね、別の方法で、王様に勇気を示したんだ」

「別の、方法で？」

ルルルは四人の冒険をかいつまんで話しました。カニエスさんはイカの化け物を前に足がすくんでしまったこと、フックフックのエビネルさんがデッキデッキの大蛇に挑んだけれどまるで歯が立たなかったこと、それなのに英雄としてエックエックの国に馬車で訪れたこと、うそつき裁判や牢屋に捕らえられたこと、それから、脱け出して王様がその勇氣に感心したこと、最後にはリングガのおばさまが現れて、自分とリリリという少女がイカの化け物と大蛇に化けさせられてしまったことなど、ミデルは目を真ん丸くして聴き入っていました。

「勇氣、か——」

話が終わると、ミデルは遠い沖を見つめてつぶやきました。

「ぼくも、本当は嘘つき裁判にかけられなきゃいけないかもしれないな——」

「え、どうしてなの？」

ルルルはびつくりしました。いったいミゲルが、どんな嘘をついていたというのでしょうか。

「あの斧はね、ぼくらが村で作ったものじゃないんだ」

「ええっ？」

それではいったい誰が、あんな素晴らしい斧を作ったのでしょうか。

「あれはね、リングガのおばさまがくれたんだ。化け物退治には魔法の斧が必要だろうからって。でも、おばさまがそのことは言うなって」

「魔法の斧？ ああ、おばさまが？」

「ああ。だって、よく考えてごらんよ、あんな美しくて鋭い斧を、ぼくら漁民の手で、しかもたった一晩で鍛えられるはずがないじゃないか！」

そう言われてみれば、たしかにその通りです。誰も不思議に思っていないませんでした

が、とてもとてもできそうにないことです。ルルルはそのことよりも、斧おのの持もつ魔法まほうの力が気きになりました。

「ね、ミゲルさん、斧おのにはどんな魔法まほうの力があつたの？」

4

「それはね、ぼくにもよく分わからないんだ。でも、あの斧おのは、おばさまが作つくつたものでもなくて、昔むかしから北きたの国くにに伝つたわる不思議ふしぎな斧おのなんだって。おばさまは、それに少すこしだけ魔法まほうを掛かけたんだって。カニエスさんの無ぶ事じを祈いのって、ね」

「斧おのは、どこにあるんだらう？」

「さあ、分わからないな。カニエスさんが持もつていなかっただのなら、海うみに沈しずんでしまったのかも知れないよ」

ミデルが悲しそうな目をしました。でも、ルルルは思いました。伝説に残る魔法の斧なら、きつとまた、それを手にする者を待っているにちがいない。きつと、海には沈んでいないんだ、と。

「斧のありかはカニエスさんが知っているかもしれないね」

ふと思いだしたように、ミデルが言いました。

「カニエスさんが？ でも、斧のことは何にも言っていなかったしなあ」

「この話をすればきつと、思ひ出すさ、斧がどうなったか」

「そうかなあ」

「そうさ、きつとそうさ。あんなに美しい斧を、忘れてしまいきこりがあるもんか。

ね、すぐカニエスさんに会いに行くといいよ！」

ミデルは、とつても良いことを思いついたように頬が紅潮していました。

「でもなあ……」

あれあれ？ ルルルはあまり乗り気じゃないみたいですよ、どうしてでしょう。そう、皆さんはもう気がついていますよね。だって、ルルルはエックエックの国からずーっと歩いてきて、このユツポユツポの小さな漁村までようやっと帰ってきたばかりなんですもの。歩いて五日も六日もかかるトツカトツカの国までなんて、今はとつても行けそうにない。そう、思ったのですよね。

「ぼく、まずはカツカおじいさんのところに帰らなくっちゃいけないんだ。何日も何日もずっと留守にしてたからとても心配してるだろうし、早くお土産を渡さなきゃ。それにね、ずっと歩いてきたから、今はちよつと疲れてるんだ。ね、ミデルさん、また今度ぜひ、魔法の斧の話聞かせて欲しいな」

そう言うトルルルは、背の高い若者たちの間をすり抜けてカツカおじいさんの待つ家へと帰って行きました。

そしてそれきり、ルルルは斧おののことをすっかり忘れてしまわすうのでした。そう、あの事じ件けんが起おこるまでは、ね。

それからルルルは、ユツポユツポの青あおく美うましい海うみで立派りっぱな漁師りょうしになるための修業しゆぎやうを始はじめました。カッカおじいさんは厳きびしかったけれど、素晴すばらしい先生せんせいでした。毎日まいにち毎日まいにち魚いそを取とって暮くらす日々ひびが、とて平和へいわで美うましい日々ひびが、飛とぶように過すぎて行ゆきました。

そうして気きがつくと、エビネルさんとカニエスさんの冒険ぼうけんからは、五年ごねんが経たっていました。海うみはいつも穏おだやかで、舟ふねの周まわりに突とつ然ぜん恐おそろしい渦うずが生まうまれることもありませせん。きつと、もうあのイカの化ばけ物ものも死しんでしましまったのだらうと、村むらの誰だれもがうわさししていました。もちろん、あの場所ばしょには近ちかづきませんでしたが。

——あの日までは。

5

さあ、ここらでもう一人の主人公、リリリの様子を見ておかなかつちやね。

フックフックのリリリは十七歳、美しい少女に成長していました。エビネルさんはと
いうと、一人前の仕立て屋さんになって、村の娘と結婚、とても幸せな家庭を築いてい
ました。もちろん、まだ自分のお店を持ってはいませんでしたね。

身寄りのないリリリは、エビネルさんの家族として一緒に暮らしていました。そう、
本当の妹みたいに。ルルルのことも気になってはいましたが、ルルルにはカツカおじい
さんという家族がいますし、住んでいる国もちがうのです。しばらくはとても寂しい想

いでしたが、やがて、ルルルの存在はリリリの心の中で少しずつ小さくなっていきました。

今から、一月ほど前のことです。時折リリリは街の市場で、恐ろしいうわさ話を耳にするようになっていました。お隣の国モースモースで、夜明け前に大蛇が現れては、小さな子供を食べてしまうというのです。

デッキデッキの大蛇だ。

リリリは思いました。あの冒険の後から、大蛇のうわさは長い間耳にしていまませんでした。リングガリンガのおばさまがやつつけてくれたのだからもう人里に出ては来ないだろうと、エビネルさんは言っていました。でも、やっぱりそれは間違いだだったので。おばさまは、ちよつとのあいだ遠ざけるだけだと言っていましたものね。

かわいいそうな子供たち——。

リリリは、リングリングのおばさまがまたなんとかしてはくれないだろうかと思いましたが、エビネルさんによれば、おばさまは杖のたつたひと突きで大蛇を打ちのめしてしまつたのです。もしもう一度、おばさまがエイつとひと突きしてくれば、また大蛇はモースモースに寄り付かなくなるんじゃないかしらと思つたのも、無理のないことです。

でもリリリは、おばさまの住むリングリングの国まで行くことなんて到底できそうもありませんでした。フックフックの国から西の果てのリングリングの国までは、日間歩き通しでも行き着くことができないのですから。十七歳の女の子一人では、どうやうたつて行くことはできないし、誰も、助けてくれる人なんていそくにありませんでした。

もちろん、エビネルさんがいてくれたらきつと行けると思ったのだけれど、エビネルさんは毎日、毎日、仕立て屋さんの仕事で大忙しでした。今ではフックフック一番の腕を持つていると言っても良いくらいの評判でしたし、もうすぐ、赤ちゃんが生まれてくるのです。家族を置いて危ない場所におもむくなんて、できようはずがありません。とてもとても、リリリが頼めることではないのです。

6

「リリリ……」

まぶしい陽射しが気持ちの良いある朝、エビネルさんが仕立て屋さんに行く前のことでした。心配そうな顔で、リリリに声をかけました。

「なあに、エビネルさん」

「心配事があるんだろ、そう顔に書いてあるよ」

「そうです、もう五年近くも兄妹のようにして暮らしているのですもの、顔を見れば、何となく分かってしまうのです。」

「ううん、何もないよ」

リリリはとつさにそう言いましたが、エビネルさんは首を横に振りしました。

「デッキデッキの大蛇のこと。そうだろう？ ぼくも聞いたんだ、うわさを」

「エビネルさん——」

「子供たちを救うにはどうしたらいいのか、ぼくだって考えていたんだよ」

リリリの表情がパアツと明るくなりました。でも、だからと言ってエビネルさんが一緒に行けるとは限りません。リリリが言いました。

「でもエビネルさん、赤ちゃんがもうすぐ。それにお仕事だって——」

「そう。だからね、ロバを一頭借りることにしたんだよ、リリリのために」

「ええ？ ロバを？」

「そうさ、ロバにたつぷり食べ物たものを積つんで、背中せなかに揺ゆられてのんびり行ゆくんだよ。まずは、ユツポユツポのルルルを訪あそねたらいい。そこから舟ふねで海うみを渡わたれば、リングガの国くにまでもう少すこしだと思おもうんだ」

「ルルルを……？」リリリは不安ふあんそうです。「でもあの子こ、わたしのことを覚おぼえてるかな——」

「大丈夫だいじょうぶだよ、忘わすれたりなんかするものか。きっと、リリリが来るのをずっと待まってるよ。それに二人ふたりで一いっしょ緒しょにリングガの国くにを訪たずねたら、きっとおばばさまだよって喜よんでくれるさ！」

エビネルさんはにつこりと笑わらいました。

「そんなことないよ。だって、もし会あいたいと思おもってたら、男おとこの子このほうあが会あいに来くるものでしょう？ ルルルはわたしのこと、忘わすれちゃってるもん」

エビネルさんは黙って、またにつこりと笑うと、首を左右に振りました。

旅の準備には、たつぷり一週間がかかりました。まつ毛の長い可愛いロバが、リリはすっかり気に入りました。そして、エビネルさんの奥さんメエランと一緒に、市場でたくさんの干した果物や肉、それから長持ちしそうな乾いたパンを買い集めました。ちよつとだけ長い旅になっても困らないように、つてね。

「お水だけはたくさん積めないし傷んでしまうから、途中で井戸を見つけたらちゃんと汲んでおくんだよ。もし、水筒が空でなくてもね」

旅の先輩でもあるエビネルさんが、言いました。

「うん、分かっている。わたしだって旅人だもん、心配ないよ、ちゃんとやるから」

出発しゅつぱつの朝あさになって、エビネルさんは急きゅうに不安ふあんになりました。

「なあ、メエラン、やっぱり止めやにしないか。女おんなの子こがたつた一人ひとりで、無理むりなんじゃないだろうか」

「ぎ、行いっておいで。きつと、大丈夫だいじょうぶさ」

メエランが勇気ゆうきづけるように、リリリに言いいます。そして、エビネルさんにも言いいました。

「リリリはもう小ちいさな子こ供どもじゃないよ。立派りっぱな娘むめだもの。大丈夫だいじょうぶ。それにぎ、あんた。ユツポユツポまではずつと街道かいどうを行ゆけばいいんだろう。途とちゆう中ちゆうにはちゃんとした宿屋やどやがいくつもあるし、大勢おおぜいの商人しょうじんが旅たびをしてるんだ。何なにか困こまったことがあっても助たすけてくれるにちがいないよ」

「うん、そうだなあ、きつと大丈夫だいじょうぶ！」

エビネルさんは不安を押し隠して笑顔を作りました。

「じゃあね、ちよつと行ってくる」

こうして、リリリはユツポユツポに向かい旅立ったのです。

7

あんまり思い出したくはないことですが、そろそろ、ちゃんとあの日のことに触れなくてはなりません。そう、あの日のことです。

ユツポユツポの漁師たちはいつものように早起きして、朝陽の昇る前に沖へとこぎ出しました。年寄衆を中心にしてホーヤレ節を唄いながら、意気揚々と漁場に向かったのです。

トーデルという若者の乗った小さな舟が、少しかだけ隊列から離れました。昨日の漁で、大きなノコギリウオのせいではっきりと穴が開いてしまった網の修理に気を取られていたのです。いつもは二人で舟に乗っていましたが、今日は相棒のスネックが熱を出してしまい、たった一人で舟を出してしまいました。周囲はまだ薄暗く、少しずつ離れてゆくトーデルの舟に気付くものはいません。

網の修理を終えたトーデルは、さて、漁を始めようと顔を上げました。ところがどうしたことでしょう、輪を描いているはずの船が一艘も見当たりません。

「さて、どうしたものかな——」

トーデルは舟底においたランプを手に取り、海面に掲げました。

「うわあ、これはすごい！」

思わず、トーデルは声を上げました。どうしてか、ですって？ そう、その通り。ランプの丸い光に照らされた海面には、見たこともないほどたくさん黒々とした魚影が

うごめいていたのです。

「うん、いつちようやるか」

せつかくの群れをやり過すしてしまふほど、トーデルは呑気のんきではありません。ランプを置き、網あみを抱かかえると、エイヤつとばかりに宙ちゆうへ放ほうりました。

「よし、上手うまいぞ」

トーデルの放はなつた網あみは、まだほの暗くらい空そらに滑なめらかな円弧えんこを描えがき、いつぱいに広ひろがると、大きな音おともたてずにするするつと海中かいちゆうに沈しずみ込んでいきました。トーデルがすかさずランプをかざすと、魚さかなたちは上手うまい具合ぐあいに網あみの中なかへと収おさまってくれるようでした。

「こりゃあ、大漁たいりゆうだぞ。みんなの驚おどろく顔かおが目めに浮うかぶようだ」

トーデルは嬉うれしくて仕方しかたありませんでした。だから、船尾せんびがあらぬ方向ほうこうへ引ひつ張ばられるように滑すべり始はじめたことにも、まったく気が付つくことがなかったのです。

ゆつくりと、トーデルの舟ふねは輪わを描えがくように流ながされてゆきます。トーデルは夢中むちゆうで、

網を引き上げます。知らず知らずのうちに、たいそう興奮して大声を上げていました。

「ひやつほーっ！ すごいぞーっ！」

そして――。悲しいかな、濁った白い色の三角頭巾が海面に現われた時にはもう、遅かったのです。びつくり仰天したトードルは必死に櫂を操りましたが、舟はどんどんどん、イカの化け物のもとへと吸い寄せられていきました。トードルの目に映るものは、とうとうあの恐ろしい渦とイカの化け物だけになっていました。

トードルはなんとかしてこの危険を逃れようと、必死で考え、声を上げました。

「ちよ、ちよつと待てよ、いいかい、ぼくはお前さんを傷つけようだなんて思っていないよ。ただ、魚を獲りに来ただけなんだ。な、だから渦をおさめて。ね、ぼくなんか食べたい。たっしておいしくないし、ぼくの舟を放しておくれよ」

言葉が通じるかどうかなんて分かりませんでしたけれど、トードルは一生懸命話しかけました。それでも、たった今水揚げした獲物を手放そうなんていう気持ちは、これっ

ぼつちもありません。

イカの化け物の目が、妖しく光りました。少しだけ、イカの身体が海に沈み込んだように見えると、トードルは化け物が行ってしまうのだと思い、よく見ようと身を乗り出しました。きつと自分の言葉が通じたのだ。化け物をやり過ぎたことで、この大漁以上みんなの注目を浴びるにちがいない。

愚かなトードルがそう思った時でした。何本ものイカの足が、もの凄い勢いで海面に飛び出し、舟の横を勢いよく叩きました。舟はトードルを乗せたまま宙に浮き、そして、ぐるりと引つ繰り返ると、網の中の魚たちがバラバラと落ちてゆきました。ちょうど、朝陽が姿を現していました。魚たちの銀色のウロコが、眩しい光を受けてキラキラと輝いていました。

それが、トードルの目に映った最後の情景だったので。

ルルルがそのことを知ったのは、ずっと後のことです。その日の漁が始まった時、まだトードルの姿が見当たらないことに気付く者はいませんでした。まだ暗い早朝の海で、漁師たちは懸命に漁に励みました。でも、トードルが見たような魚影はなく、数少ない魚が逃げてしまわないように何とかして網を広げ、船を走らせたのです。

「おい、ルルルや、トードルの船はどこかな？」

最初に気付いたのは、カッカおじいさんでした。おじいさんはすっかり高く昇った眩しい太陽を背に、漁船を一艘ずつ数えました。

「なあ、やっぱりいないようだぞう」

ルルルは、そんなことがあるもんかと思いつつも、カッカおじいさんと一緒にトー

デルの小さな舟を探しました。

「おーい、トーデル！ トーデルの舟はどこだー！」

ルルルは大声で叫んでみました。みんなが自分の周りの舟を見ました。でも、トーデルの舟だけははどこにもいません。

もうすぐ陸が見えてくるという頃、小さな小さな島のような塊が、海の真ん中にぽつんと現われました。

「あれ、何だろう」

漁船の先頭にいたルルルが、カッカおじいさんに言いました。

「くじらの背中だろうか？ いんや、ちがうな、だがなあ、こんなところに島があるはずはなからうに」

「おじいさん、あれ、舟だよ、舟が引つ繰り返っているんだ！」

ルルルは懸命に權を操りました。舟の底が、どんどん近づいて来ます。他の船もそれ

に気付き、周りに集まってきました。

「おい、この小さい舟……」

「ああ、そうだ、こりやあ、トーデルの……」

「トーデル……何があつたんだ……」

トーデルの舟を引き、陸に戻った漁師たちは、とうとう真相を知りました。舟の横腹が無残に砕けており、イカの脚に付いていたにちがいない気味の悪いねばねばした塊が、その部分にこびり付いていたのです。そして、嫌な酸っぱい臭いが、あたりには充満していました。

「これは……カツカじいさんよう……」

「ああ、ちがいねえ、これは、あの化けモンだ」

「ああ、とうとう、また現われやがったんだ」

「いったいぜんたい、トーデルはどうして化け物の近くなんかに……」

「うう、俺たちが気付いてやれてたらよう……」
男たちは口々に言い、やがて静かに泣き始めました。
カッカおじいさんがルルルの肩に手を置き、トードルのためにホーヤレ節を唄い始めると、漁師たちがそれに続けました。漁師たちの声は高く低く響き、日がつぷりと暮れるまで憐れなトードルを悼み続けたのでした。

9

一週間が、過ぎていました。ある朝のこと、ルルルがカッカおじいさんに言いました。

「ねえ、おじいさん、ぼく、イカの化け物を退治するために、何かできることはないかな」

「お前が、かい？」

「うん」

「そうさなあ——」

カッカおじいさんはちよつと考え込んでいました。

「あ、ほれ、何といったかな、きこりの」

「カニエスさん？」

「そうだよ、カニエスさんに頼んでみたらどうだい？」

「でも、カニエスさんには無理だよ、恐ろしくつて、身がすくんじやうんだから」

「そうかな……その後だつて、いろいろな経験をしただらう？ それで王様だつてカニ

エスさんの勇気を認めたんじゃないか？」

「うん……それはそうだけど」

「斧があつたらう、ほれ、魔法の斧だつて、お前が言つてたじゃあないか」

そうです。魔法の斧です！ どうして今まで忘れていたのでしょうか。ルルルは、よう

やく思い出し^{おも}ました。ミデルの話^{はな}を、そして、カニエスさんなら斧^{おの}のありかを知^しっているかもしれないということを。

「行^いって見たらどうだ、トツカトツカに」

「ぼくが、トツカトツカに？」

「そうとも。きつと、喜^{よき}んでもらえるぞ」

「でも、漁^{りぎ}が……それに、ぼくだってそのうちには渦^{うず}に行^いかなきゃならないんだし」

「ああ、そうさな。だがね、ルルル」おじいさんが言^いいました。「あの化^ばけ物^{もの}をなんとかせにやあならん。お前^{まえ}さんがカニエスさんに助^{たす}けを求^{もと}めに行く^ゆのなら、誰^{だれ}も反^{はん}対^{たい}するモンはおらんだろうさ」

「そうかな」

「あああ……、そうさあ」

カツカおじいさんは、その言葉^{ことば}に自信^{じしん}を込^こめてゆつくりと言^いいました。

三日ののち、漁師たちのはげましを受けて、ルルルはトツカトツカに向かい出発しました。ユツポユツポからトツカトツカまでは、五日か六日の距離です。たしか、カニエスさんは五年前のあるとき、歩き通してたつた三日間で、トツカトツカまでやって来たのでした。ルルルはその話を思い出して、自分も同じように寝ずに急ぐべきだろうかと思いましたが。だって、一刻も早く、イカの化け物を何とかしなければならぬのですから。

一日目の晩、ルルルは居心地の良さそうな宿屋さんを通り過ぎ、歩き続けました。でも、ルルルはカニエスさんほど立派な体格ではないし、もう、くたくたでした。もう少しだけ、もう少しだけ先に進むんだと自分に言い聞かせながら頑張って歩きましたが、もう本当に前へ足を出すことが難しくなっていました。だから、ほのかな橙色に光る窓を道の向こうに見つけたルルルがふらふらと向きを変えてしまっても、誰もルル

ルを責めたりはしないですよね。

「ごめんください、旅のものです」

ルルルは、家の中の人をびつくりさせないように、優しく扉を叩きました。すると、静かに扉が開き、品のいい婦人が顔を出しました。婦人はルルルを見てたいそう驚きました。まだ、子供のように見えたからでしょう。

「まあ、あなたのようにお若い方が、こんな夜中にどうしたのかしら？」

「あの、ぼく——」

何とか微笑みを作つてそう言うと、ルルルはへなへなとその場にへたり込んでしまいました。

「あらあら、大丈夫？」

婦人がルルルに手を差し伸べました。

「おい、ターニア、どうしたんだい？」

奥の部屋から、男の人の声が呼びかけました。この婦人と同じように、品の良さそう
な、丸みのある低い声でした。

「あなた、若い男の子が、疲れ切ってしまったているようなの。うちで休ませてあげても
いいかしら？」

「おお、そうか、でも、こんな夜中にどこから来たんだらう？ まさか、ユツポユツポ
から歩いてきたんじゃないかね」

そう言いながら、男の人が玄関口まで出て来ました。男の人はさも軽そうにルルルの
体を担ぎ上げ、柔らかな寝椅子にそつと横たえました。ルルルはいつの間にかすーすー
と寝息を立てています。優しい微笑みを浮かべてそれを見守るターニアに、男の人が言

いました。

「な、ターニア、この子、きつとお腹をすかせているにちがいないよ。温かいスープを用意して差し上げなさい」

「ええ、そうね！」

ターニアは小走りに台所へ向かい、大きな鍋を火にかけました。ルルルはぐつすりと眠っています。

スープが十分に温まった頃、ターニアがルルルをそつと起こしました。でも、ルルルは目を覚ましません。とんとんと肩を軽く叩いても、両腕を揺すつても、ルルルはぐつすりと眠っていました。男の人がにこにここと笑いながら、ターニアにスープを運んでくるように言いました。

「ぎ、温かいスープよ。お腹がすいたでしょう」

まろやかな香りに、ルルルがくんくんと鼻を動かしながら目を開けました。男の人と

ターニアが、嬉しそうに笑みを浮かべています。

「やあ、起きたね。まずはターニアのスープを飲むといい」

「あ、あなたは——？」

「おっと、若いのも、ここは私の家だよ。まずは自分から名乗りなさい」

「いいのよ、さあ、まずは一口お飲みなさい」

ターニアが丸い器から、ルルルの口元にスープを運びました。

「あ、ありがとうございます」

ルルルはとつても美味しそうに、スープを飲みます。そう言えばここところは不漁続きであまりお腹いっぱいには食べませんでしたのです。

「美味しい……」

ルルルはじんわりと言いき、思い出したようにはっとして顔を上げました。

「私はガムレン。猟師をしてる。ターニアの作ったスープは旨いだろう、私の獲った山

鳥の肉から良い出汁が出ているしねえ」

さつきは先に名乗れと言ったガムレンですが、微笑みながらそう言いました。ルルルは急いで口の中のものを飲みこんで言いました。

「ぼく、ルルルです。ユツポユツポから来ました。トツカトツカのカニエスさんに会いに行く途中で」

「え、トツカトツカの国へ？」

ガムレンとターニアはたいそう驚いていました。でも、どうしてでしょう。ここはユツポユツポの国の南東の外れに近い辺りです。トツカトツカの国へ行く人も多いにちがいないのですが。

「その、カニエスさんというのは、あなたの親類なの？」

「いいえ、そういうわけじゃないんですけど」

「でも、よつぼど大事な人なのね。こんな時にトツカトツカの国まで行くんですもの。」

ね、あなた」

「ああ、そうだね。でも良かったね、ルルルくん。そのカニエスさんというかたは無事なんだろう？」

ルルルは二人が何を言っているのか分からず、ぽかんとしていました。

「ふふつ。ルルル、もつと食べるかしら？」

口を開けているルルルを見て、ターニアが笑いました。

「ちよ、ちよつと待って。『無事』って、トツカトツカで何かあったんですか？」

「『何か』って、まさか、知らないのかい？」

さあ、いつたい、トツカトツカの国で何かあったのでしょうか。ルルルは、カニエスさんに会うことができるのでしょうか？

(つづく)